

歌姫の小夜曲

粕谷 幸子

美しい女性である。つい微笑んでしまった。六十五歳からの手習いである。どうか、気分のいい先生であること、願わくば、美しい女性であって欲しい。

わたしの願いは、完全に叶えられた。

S先生のレッスンを受けるようになって、かれこれ二十年になる。家の事情で長期の欠席をしたことはあるが、この夏の猛暑は何か切り抜け、一回も休まなかった。

「どうでしょう、原語もいいと思いますが、この際、日本語の美しい訳がついている歌にチャレンジしてみませんか？ さしあたり、シューベルトの『セレナーデ』なんてどうでしょう。曲はご存じでしょうし、歌詞もほとんどご存じだと思います。あとは、あの美しい日本語の歌詞を歌いこむだけですから」

わたしは、即座にうなずいた。

胸の奥底で熱い思いが揺れ始めていた。あの日の息の詰まるような記憶を、わたしは少なくとも十年は引きずっていた。

「今、先生達が駆けて行ったけれど、ここで外国の歌を聞いていたなんて知ったら、叱られないかしら」

控え室から、クラスメート達のざわめきが消えた。彼女達の視線がわたしに集中した。

あの時、わたしは、何故、あの場所に座り込んだままでいたのか、不思議でならない。控え室を飛び出して、一人、何処かで泣いてしまえば、長い間、引きずる必要はなかったのかもしれない。そんな気がする。

今、わたし達の前で美しい声でシューベルトの『小夜曲』を歌ってくれた歌姫は、わたしに近寄って囁くように言った。

「心配しないで、大丈夫よ。これ、ドイツの曲だから」

その頃、すでに、十八年にはイタリアが、十九年にはドイツが、それぞれ全面降伏していたことは、軍国少女達にも知らされていたが、完全にわたしの頭から消えていた。

ただ、恥ずかしさだけが、わたしを打ちのめした。知識のかけらもないくせに、雰囲気をごち壊す発言をした自分が許せなかった。同時に、これから先、わたしは知識らしい知識に出会うことなく、明日死ぬかもしれない、そう思うと、やり場のない悲しみが、痛みになって、全身を真直ぐに通り返して行った。以来、わたしは、好きだった『同期の桜』を歌わなくなった。

昭和二十四年、進学のため上京。未だ食料事情の悪い東京は贅沢をする必要もなく、その分、『知らないこと』を

昭和十九年、女学校三年生（旧制）になったわたし達は、金沢市の郊外にある軍需工場で特攻隊の飛行機の部品をこしらえていた。

明けて二十年、年明け頃から、材料がとどこおり、わたし達は、クラス別にあてがわれた控え室で、材料を待つことが多くなった。

十二畳くらいの和室に二十人程いただろうか。その中に、声の美しいクラスメートがいた。音楽の時間には、先生名指しで時局に当たり障りのない童謡などを歌ってくれた。

その日も、クラスメートの一人が、彼女に歌をねだった。そして、彼女が歌ってくれたのが、シューベルト作曲の『小夜曲』だったのである。何という美しいメロディだろう、何という美しい声だろう。歌詞を聴き取る余裕などなかった。

「ありがとう」と誰かが言った。「素敵」の声もかかった。「泣いちゃいそう」と手で覆ったクラスメートもいた。わたしも、この感動を伝えたかったが、ため息しかでなかった。

その時である。控え室の前を駆けていく先生達の姿が目に入った。「あら、材料が届いたんだわ」とつぶやく声が聞こえたが、誰一人、腰を上げようとはしなかった。

何故、あの時、わたしは、あのようなことを口走ってしまったのか。今、考えると、あまりにも美しい歌声と控え室の窓ガラスに写った先生達の急ぎ足が、一瞬、恐怖心となって、わたしの頭の中を横切ったに違いない。

一つずつ消していくためにお金を使った。地方出身者として、正直、恥も外聞もなかった。

そして、わたしは、六十五歳の手習いのため、S先生の許を訪ねたのである。

「セレナーデの楽譜、ご用意できますか？」

「はい、できます。次のレッスンの時、持ってまいります」

帰宅するなり、わたしは、同窓会の名簿から歌姫の名前を探した。東京在住の友人から、彼女は旧姓のままだと聞いていた。理由を尋ねたが、離婚したらしいとだけ教えてくれた。

川村花。歌姫は、金沢在住のままだった。

わたしは、電話を入れた。久々に彼女の声が聞ける嬉しさが、受話器を持つ手に力が入った。

電話に出てきた女性の艶っぽい声に思わず、「花さんですよ？」と言った。

「いえ、花は、わたしの母です。ところで、あなたはどなたですか？」

わたしは、女学生の頃の美しい歌声のこと、シューベルトの『セレナーデ』のことなど、かいつまんで話した。途中から、娘は電話の向こうで、ケラケラと笑った。

「母が、歌を歌って聞かせてたんですって、考えられませんか。同居してるわけではありませんから、何とも言えませんけど、物心ついた頃から、わたし、母が歌ってる姿なんて一度も見ただけありませんわ」